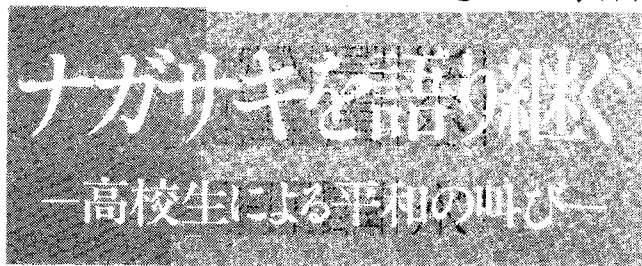


戦争を知らない世代へ ㉑ 長崎編



創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ②

ナガサキを語り継ぐ——高校生による平和への叫び

昭和51年 8 月 9 日 初版第 1 刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します

0036—7021—4438

発刊の辞

長崎に被爆継承の輪がまた一つ増えた。高校生によるはじめての被爆体験集「ナガサキを語り継ぐ」がここに発刊の運びとなったのである。我が長崎の青年部が進めてきた平和運動の流れを、さらに強く大きく担いゆく一環として、その波紋の行方を見守りたい。高校生のあいだでの風潮をあらわすものとして、三無主義、四無主義などがよくいわれている。ここで現代の高校生について論じるつもりは毛頭ないが、無気力、無関心、無責任、無感動——それは確かに、高校生の一側面をあらわしているのかもしれない。

しかし、果たしてそんな表現が全体に通じるものかどうか。たとえば社会問題に対する彼らの態度。表面上は無関心を装ってはいても、その実はかなり関心度は高いのではないか。少なくとも、大人が想像している以上に。

「語り継ぐ会」のメンバーが、市内の高校生を対象に原爆に関するアンケート調査を行なった。巻末に付記として収録したが、その分析結果をみると、彼らなりに原爆についての意識はもっているし、関心も高いようだ。むしろ、考えてはいるが、口には出さない、いや出そうとしない閉

鎖的な傾向が高校生のあいだで強くなっているのではないだろうか。

ともあれ、そうした高校生自身が自ら考え、行動し被爆者の生命からほとばしる平和への叫びを我が痛みとして受け止め、そのまとめとして被爆体験集を出版したことに心から拍手を送りたい。

被爆三十年の転換期を過ぎた三十一年の今年を期して、平和運動も証言運動から継承運動へとその比重が変りつつあるように思う。そうしたなかで、高校生自身が自らの手で被爆体験集の出版までこぎつけた意義は大きい。平和の松明は、戦争体験者から戦争を知らない世代の青年へと受け継がれ、そして戦無派の高校生へ――。

むろん、この地球を何十回も破壊し尽くす現代の核兵器の現実の前には、我々の運動を阻む幾多の障害が待ちうけているに違いない。しかし、ひとたび掲げた大松明は、いかなることがあっても二十一世紀への世界の声として高めゆく決意である。願わくば、二十一世紀に生きる高校生の努力の結晶であるこの一書が、その遙かなる前途への旅立ちとならんことを祈ってやまない。

昭和五十一年八月九日

創価学会青年部

長崎県青年部長 小林喜丸

目

次

発刊の辞

●第一章 この証言を永遠に

変り果てた弟.....	江口キクエ	10
木炭自動車で死体を運搬.....	杉本新助	15
緑の町が一瞬に焼野が原.....	安井 栄	19
平和の尊さをかみしめよう.....	丸尾周一	22
子供の死体に込み上げる怒り.....	松尾熊太郎	25
とうとう一人ぼっちに.....	匿 名	28
末娘の体から膿が.....	宮崎あさ子	31
一度に四人の子供を失って.....	片岡ツイ	35
今もうすぐ原爆の傷跡.....	内田縫子	38
こんな焼き方ばしてすみません.....	前田ラク	41
二度とあの光線は見たくない.....	鶴山チャ	46

瓦礫と灰燼の山と化した長崎	吉田仁一郎	49
火葬の順番を待つ死体	江島シマヲ	53
原爆で狂った私の人生	福田正茂	56
一家をメチャメチャにした原爆病	永野秋子	60
首なしの赤ん坊を背負って	中島テイ	64
不安と恐怖、思い出したくもない	山内久子	68
原爆は人類のガンだノ	木下政夫	71
婦らぬ子供たち	山下キク	76
頭上に黄色い火の球が	岩田きくの	80
水さえ飲めず、ただ生きながらえて	永尾スミエ	84
かわいい孫たちにあの日のことを	加松ハツ	88
夏がくるのが恐ろしい	浜内ヨシ	93
大八車に死体の山	橋ノロカダ	96
あの日をけっして忘れないで	大塚ハルエ	100
同じ人間なのに	林田マチエ	104

人間が人間でなくなった日	宮木西男	108
遺体のないまま夫の葬式	山口マシ	112
この体験を後世に伝えてノ	草野ハツヨ	116
語り継ぐことがせめてもの供養	一の瀬よし子	119
裸の背中に次々と瓦が	中田角治	122

●第二章 父母の願い

父の口ぐせは「もう二度と」	高比良ひとみ	128
あの日の夜景は地獄の夜景	間 真弓	131
語り継ぐ運動をこの手で	木場早苗	135
隠しきれない白血病への不安	道端法子	139
母の怒りを僕の手で	吉岡輝彦	142
今はのきわに子守歌を歌った母	宮地靖子	146
平和の証を立てるまで	田中正則	151

●第三章 平和への共戦

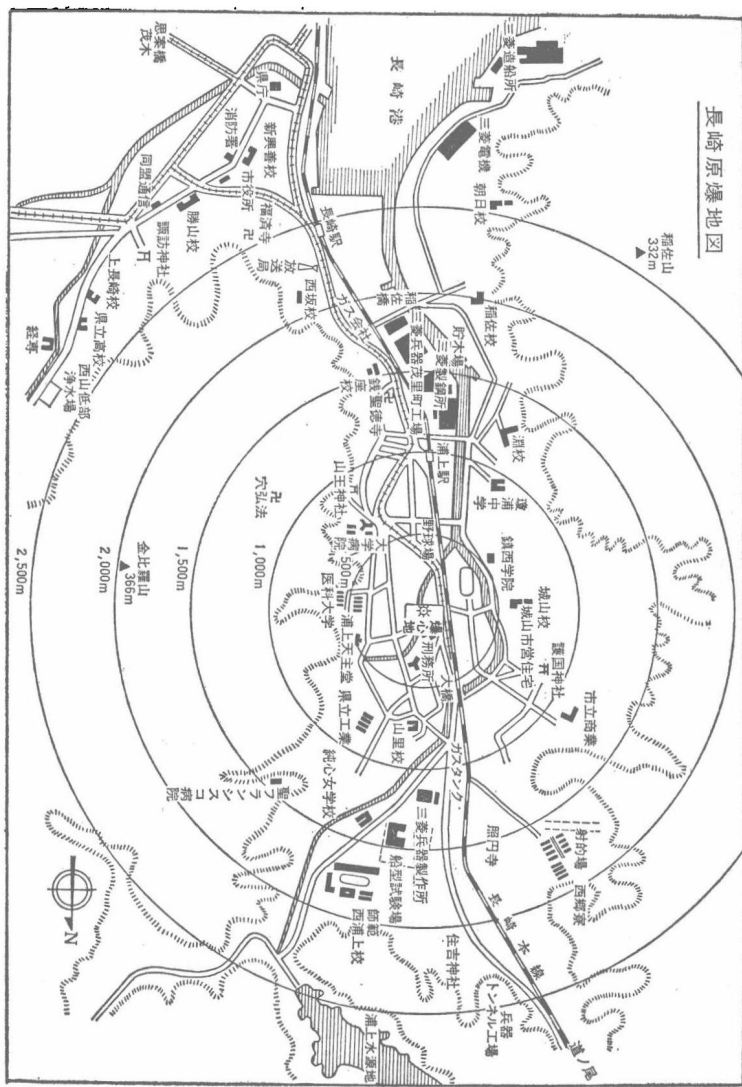
原爆の破壊力と後症害……………山口徳弘 156

戦争と科学……………桐山和宣 167

あとがき

付記 戦後世代（高校生）の原爆に対する意識調査

長崎原爆地図



第一章

この証言を永遠に

変り果てた弟

江口 キクエ

時津町・自宅近くの防空壕
入口（爆心地より8.5キロ）
で被爆。当時30歳

原爆、それは数多い原爆を体験した人びとにとって、心に焼きついた惨憺たる心と体のキズ跡を思い出させる呪わしいものです。

昭和二十年、当時私は長崎市内から八キロほど離れた時津という山がちな町に住んでいました。家には、母、妹、そして長崎駅で働いていた弟の輝男との四人で暮らしていました。次に申しあげることは、そのころ私がつけていた日記を抜粋したものです。

八月九日 晴れ

今日は、私にとっても、みんなにとっても恐怖の一日となった。まるで、悪夢を見ているようで、頭がすっきりしない。私は生涯、この日を忘れることができないだろう。

今日は、朝からよく晴れていた。前から決めていたとおり、大掃除をすることにした。昼ちかくになると、警戒警報が鳴り、私たちは驚いて近くの防空壕に逃げ込んだ。しばらくするとそれ

も解除になり、みんなぞろぞろ出て行った。その時、また敵機がやってきたかと思う間もなく長崎の上空に白い大きなものがふわふわと落ちてきた。突然、閃光が走り、大音響がそこらじゅうの山々に響き渡った。みるみるうちに、黒ずんだオレンジ色の煙が立ち上り、砂ぼこりが空高く舞い上がった。私は顔がヒリヒリするのを感じたが、そうしているうちにも砂ぼこりがすごい勢いでこちらへやってきた。だれかが大きな声で、「伏せろ、伏せろ」というのが耳に飛び込んできた。私は夢中で腹ばいになった。背中の上を熱い風が通ったかと思うと、雨戸や瓦が吹き飛び、ガラスが粉々に飛び散るものすごい音が、鼓膜をゆさぶった。

しばらくすると、辺りは、しんと静まりかえった。みんな、ほっと息をついて立ち上がった。そしてなんとはなしに長崎のほうを眺めた。この瞬間、私は呆然となった。まったく火の海という言葉がそのままではまるような、すさまじい光景が目にはいった。その時、私の脳裏に浮かんだのは、輝男のことだった。「輝男は大丈夫だろうか」そう思うと私はたまらなくなって、母、妹と三人で長崎の町へ行くことにした。

焦る気持を押えながら道ノ尾までやってくると、数人の警官が私たちを呼び止めて言った。「今、長崎の町に入るとは危なか、さあ、早う帰らんか」と追い帰されてしまった。私は激しい憤りを感じたが、どうすることもできず、しぶしぶ帰ることにした。それまで輝男のことばかりを考えていたから気がつかなかったが、私の周りにはむごたらしい光景であった。化け物としか

いいやがない人間の列がどこまでもかぎりなくつづいていた。全身丸焦げになって男女の区別もつかない者、手や足がちぎれて骨が見えている者、あちこちに水疱ができ醜くただれた者、血が噴き出している者、それはまるで幽霊のようであった。いやむしろ、それよりも恐ろしい一塊りの肉片が歩いているようであった。私はその異様な光景にまばたきひとつでできなかったが、やっと氣を取り直し帰途についた。

家に帰っても輝男のことが頭から離れなかった。あの光景をまざまざと見せつけられて以来、輝男はもう生きてはいないと思いつながら、もしやという期待が私の心をかき乱していた。とかくするうち時計が十時を打った。すると、かすかではあるが、自転車の音が聞こえてきた。「輝男」と私は外へ飛び出した。やはり輝男だった。私はなんとも言えない感動で胸が熱くなるのを感じた。「輝男。よう無事で帰ってきたね。さ、早う家に入らんね」私は抱きかかえるようにして、家に連れて入った。母も妹も驚いた様子だったが目には涙が浮かんでいた。

すぐにろうそくを輝男のわきに置き、そのかすかな光が輝男の顔を映し出したとたん、私は体中の血が凍るのを感じた。それは、人間ではなかった。だれなのかもわからないようにふくれ上がった額や頬、目は落ちくぼみ、そのふくらんだ唇には赤味がなかった。変り果てた輝男の姿には、恐ろしさは感じなかった。いやむしろ激しいやり場のない憤りを必死にこらえていた。でもそんなことをいっている場合じゃない、早く輝男を治さなければ……。すでに病魔との激しい闘

いはじまっているのだ。

八月十日

輝男を粗末ではあったが近くの救急病院に運んだ。しかし、患者の数が次々と増え、ろくに薬もなかったため、断わられてしまった。治療は私たちだけでやらなければならぬ。

まず私は、手や足のあちこちにある水泡を裁縫バサミで切ることにした。その水はどんぶり一杯になっても止まらず、あとからあとから出てくるのだった。次に顔にガーゼをあてたりしていた。そのころ、薬というものはほとんどなく、カキやビワを煎じてつけると良いというのでやってみたが、ほかの人びとが次々と死んでいくのを見るにつけ、私はひどく心配になった。幸い、横道に薬屋をしている親類がいたので、そこを訪ね、付け薬をもらってきた。私は輝男の回復をただ願うばかりだ。

◇

◇

◇

その後、私はくる日もくる日も輝男の看病をしました。しかし、なかなか治ってはくれませんでした。日がたつにつれ、被爆者は次々と死んでいきました。私は心配でなりませんでした。でもそうするしかないと思い、必死で看病をつづけました。三カ月ぐらいたってやっと輝男は回復の兆しを見せはじめたのです。

たった一発の爆弾が、町を廃墟と化し、肉親を奪い去りました。戦争はもういやです。原爆はもうたくさんです。私には何の力もありません。しかし、このむごたらしい体験をより多くのひとびとに語り、反戦、反原爆を訴えていこうと思っています。